

# 日本語テキストにおける出来事個体の構成について

## Event Structure in Japanese Text

内 山 潤

Jun UCHIYAMA

### 1. はじめに

日本語学の分野で、時間表現の研究がなされる場合、その説明には発話時を基準とした線イメージが用いられるのが一般的である。例えば、日本語教育学会（2005 pp.130-131）『新版 日本語教育辞典』では、テンスについて、次のような定義がなされている。

通常、述語が表す事態は、文において時間軸上のどの時点においてのことかが表されるが、述語の表す事態を、時間軸上のどの時点のこととして位置づけるのか（過去か現在か未来か）、その表し分けにかかわる文法形式を「テンス」と呼ぶ。

ここで言う時間軸が、線をイメージしていることは明らかであり、時間の線イメージに依拠した説明となっている。こうした線イメージを用いた時間の記述は非常に一般化しており、日本語教科書における説明にもしばしば見られるほどである。この線による時間のイメージは、時計による時間のイメージを直線におきかえることで得られる。

しかし、この線イメージには、記述としての限界もある。まず、発話時は、点、つまり瞬間として表されるが、実際には一文の発話

であっても、時間がかかるので、瞬間には対応しない。また、よく指摘されることであるが、小説などの物語における過去形は発話時には全く対応していないし、この種の物語的過去の使用は日常の発話においてもしばしば見られるものである。そもそも、子どもが過去形を習得するのは、時計の読み方をマスターするより先であり、テンスやアスペクトは線イメージによって規定されているわけではない。線イメージはあくまで説明の便宜としてわかりやすいために広く用いられているものと解釈すべきである。

人間が時間をどのように認識しているかを研究する哲学的時間論の分野では、古くから様々な議論が行なわれてきた。哲学的時間論の分野でも線イメージはしばしば用いられるが、マクタガートのように、線イメージによる時間の議論から時間の非実在性を問いた議論（入不二 2002など）や、線イメージに依拠しない時間論も多数存在する。人間の時間認識が線イメージに依拠しないものであるとすると、言語における時制の説明も線イメージに依拠しない説明の方が、現象をよりよく説明できる可能性がある。

本稿では、線イメージに依拠しない時間論

として、伊佐敷(2010)の理論を取り上げ、サッカーの試合という出来事を説明するテキストを分析することで、テキストの時間的な構成がどのようになっているか、分析を試みる。併せて、工藤(1995)において指摘された継起性のタクシスについても、伊佐敷の理論の枠組から新たな説明を提案する。

## 2. 伊佐敷(2010)の時間論

伊佐敷(2010)では、時間の線イメージを批判し、哲学的時間論において時間の線イメージを前提にすべきではない、と述べている。その理由は、まず第一に線イメージはあくまで比喩であり、比喩は限界を持つからである。つまり、時間と線イメージは何らかの類似性を持つために比喩として用いられるのであるが、両者の間には差異も存在する。このため線イメージが持っているある性質を、時間が持っていない場合にも、時間の性質として誤認してしまう危険があるというのである。

次に、線イメージが空間的に用いられることも理由とされている。線イメージは空間的にも時間的にも用いられ、両者は排他的である。時間的に解釈している場合は、我々は自分が既に持っている時間概念に基づき、そのような解釈をしている。線イメージのこのような使い分けが可能になっているのは、線イメージに依拠しない時間概念の理解があるからこそであり、つまり線イメージを使う以前に、我々は時間概念を持っているのである。

その上で、伊佐敷(2010)は、

- (1) 過去が確定しているとはどういうことなのか。
- (2) 現在から過去への移行が目撃不可能で事後的にしか気づけないのはなぜか。
- (3) 現在は瞬間なのか、幅を持つのか。

という3つの問題を基点として、「出来事個体」という概念を用いた時間の説明を提唱し

ている。

出来事個体は、伊佐敷によれば、次のような存在者とされる。出来事には、「出来事個体(個体としての出来事)」と「出来事一般(タイプとしての出来事)」とがある。「出来事個体」は過去の出来事、「出来事一般」は未来の出来事にほぼ相当する。未来の出来事は、その細部が確定しておらず、矛盾した記述が可能であり、「個体」とは言えない。これが、過去の出来事になると、細部が確定し、いかなる細部においても矛盾した記述が許容されることのない個体となる。

出来事個体は、多くの時間的部分から成るが、現在の出来事は全ての時間的部分が登場するまでは、完全な一個体とはならないがゆえに、個体と呼ぶことはできない。よって、出来事個体と呼べるのは過去の出来事のみである。以上のように、未来の出来事は過去の出来事とはそもそも存在性格が異なっている。このため未来の出来事が現在の出来事を経て過去の出来事になるわけではなく、現在という場において、出来事個体が生成していき、完全な一個体となった時点で過去へと移行する、というのが伊佐敷の時間論の基底にある考え方である。

伊佐敷はこのことをオリンピックを例として説明している。これから開催予定のオリンピック(例えば2020年に開催予定の東京オリンピック)については、「マラソンで日本が金メダルを取る」可能性も「マラソンで日本が金メダルを取らない」可能性も存在し、矛盾する記述を許容する。つまり、現時点では、「東京オリンピック」という記述は、「東京において2020年に開催されるオリンピック」の省略形であり、個体としての出来事を指示しているわけではない。東京オリンピックという出来事個体は、現時点ではどこにも存在せず、その生成が始まるのは開幕した時である。

これに対して、既に終了したオリンピック（例えば「ロンドンオリンピック」）については、全ての競技の結果が、その細部も含めて完全に確定している。したがって、「マラソンで日本が金メダルを取った」と「マラソンで日本が金メダルを取らなかった」のような矛盾した記述が許容されることがない。つまり、「ロンドンオリンピック」というのは、完全な個体としての出来事を指示している。出来事個体はその開始とともに生成が始まり、全ての時間的部分が登場して初めて完全な一個体として成立し、それ以降は変化も消滅もしない存在者であるというのが伊佐敷の考えである。以下、伊佐敷の時間論についてより詳細に見ていく。

## 2.1 過去の確定性

伊佐敷（2010）は、(1)過去が確定しているとはどういうことなのか、という問いには、出来事個体という存在者が変化も消滅もしないということにその根拠を置いている。個体には、人や物などの「物個体」と、「出来事個体」が2つが存在する。「物個体」はその誕生と共に完全な一個体として成立し、様々な変化を受けた後に消滅に至る。「物個体」は存在の全期間を通して完全な一個体であり続ける。これに対して、出来事個体はその出来事の開始と共に生成が始まるが、出来事が現在進行中には、存在しているのは各時間成分のみである。そして、その出来事が終了すると共に完全な一個体として成立する。一旦成立した出来事個体は変化も消滅もしない。この出来事個体の不変性こそが、過去の確定性の源泉となっていると伊佐敷は主張しているのである。

## 2.2 現在から過去への移行の目撃不可能性

次に、過去の目撃不可能性について、伊佐

敷は次のような例を挙げて説明している。誰かが、現在が過去になるようすを目撃しようと試みたとする。机に座ってじっと観察するが、同じ机が見え続け、外からは鳥の声が聞こえてくる。観察できるのは物の性質の変化（或いは不変化）だけであって、「現在が過去に変わる」様子は観察できない。しかし、そのまま数分立って、観察を始めたのは確かにもう過去のことだ、と気づく時、「今から観察する」と思ったときの「今」が既に「数分前」という「過去」になっていることに気づく。過去への移行は、このように完了した形でしか気付かれない。

この現象も、伊佐敷は、気づいた時に、さきほどの観察の開始という出来事個体が遡及的に成立しているということで説明している。世界には多くの物個体が存在し、それらはそれぞれ個体としての数的同一性を保ちつつ絶え間なく変化している。しかし、変化が生じているだけで、そこに出来事個体が成立するわけではない。何かが「完了」して初めて出来事個体は成立するのであり、次々に切れ目なく生じては消える変化をある範囲で「完了」したひとまとまりのものとすることが出来事個体を出現させることである。

さらに、伊佐敷（2010 p.33）は「出来事個体の成立は我々の指示に大きく依存していると思われる」と述べ、出来事個体の成立と指示との関係を強調している。前段の例では、「観察を始めたのは確かにもう過去のことだ」という指示によって、「観察の開始」という出来事個体が成立し、同時にそれが「既に起こっていた」という形で過去に移行しているのである。

## 2.3 現在は瞬間なのか幅を持つのか

「現在は瞬間なのか、幅を持つのか」という問題について、伊佐敷（2010 p.38）は、

「現在瞬間説の背後には『線上の点としての現在』としてのイメージがあるように思われる。線によって時間をイメージし、その線上の点によって現在をイメージするというものである」と述べている。その上で、「時間の線イメージは比喻であり、時間論において前提にすることはできない。」と主張している。

では、線イメージを前提としない、現在瞬間説の根拠は存在しないのであろうか。伊佐敷は、アウグスティヌスの議論を引用し、現在瞬間説を導く議論として以下のものを挙げている。

1. 幅のある現在の中において時間が経過している(背理法の仮定)。
2. したがって、幅のある現在の中のある部分は既に過去になっている。
3. したがって、その部分は現在でありかつ過去である。が、これは矛盾である。
4. したがって、現在に幅があるという仮定が誤っており、現在に幅はない。

(伊佐敷 2010 p.40)

その上で、1 から 2 を導くために、次の暗黙の前提があることを指摘する。

A: 時間が経過すると、現在が過去に移行する。

前提 A が否定されれば、推論全体は否定されることになる。

伊佐敷は、時間経過に「現在から過去への移行でないような時間経過」(現在内時間経過)と「現在から過去への移行であるような時間経過」(過去移行的時間経過)があるとし、この前提を否定している。つまり、現在内時間経過は常に進行しており、その中において物個体の性質の変化が次々と起っては消えているが、それだけは現在は過去に移行しない。そこに出来事個体が成立し、指示されることによって過去移行的時間経過が現れるとしているのである。

伊佐敷は、二種類の時間経過に対応して、「現在」のあり方も二通り存在することになると主張している。一つは「現在内時間経過」だけが生じている現在で、これは伊佐敷によれば幅があるわけでも、瞬間でもない、言わば「非測定的現在」である。伊佐敷はこれを「経験の場としての現在」と称している。この「経験の場としての現在」が、出来事個体によって区切られることにより「幅」を持ち、その都度「過去でないものとしての現在」が現れる。ただし、その「幅」ははっきりした大きさを持つわけではない、と伊佐敷は主張している。

#### 2.4 時間の線イメージの否定

以上のように、伊佐敷は、時間の線イメージ上で、かつて未来であった出来事が、時間の経過によって現在になり、過去になるという時間論を否定している。伊佐敷によれば、例え同じ名前と呼ばれる出来事であっても、未来における出来事 2 (例えば 2013 年時点における「東京オリンピック」) は、固有名ではなく不確定記述の省略形(「東京において 2020 年に開催されるオリンピック」)である。これらは完全な出来事個体として成立した過去の出来事(例えば「北京オリンピック」や「ロンドンオリンピック」)とは存在性格が異なる。実際に出来事個体が生成し始めるのは、その出来事が始まった時である。そして、その完了を持って完全な出来事個体として生成する。出来事個体は、その完了を持って完全な一個体として成立し、その後は変化も消滅もしないという存在性格を持った存在者である。

伊佐敷の時間論では、我々は常に「経験の場としての現在」に生きている。「経験の場としての現在」には多数の物個体が存在し、絶えず変化し続けている。我々が見ることが

できるのはこの変化のみである。我々は、その変化の中に完了したのを見出し、出来事個体として、指示する。指示の働きによって、その変化は出来事個体として成立し、確定したものとして過去に移行する。こうしたプロセスの繰り返しが我々の時間感覚を作っているというのが伊佐敷の主張である。

### 3. 伊佐敷の時間論に対する批判的検討

伊佐敷の時間論は、時間の線イメージを批判し、出来事個体という存在者を設定した上で、その固有の存在性格から過去・現在・未来という我々の時間の感覚を説明している。この説明は、比喩である線イメージを用いた説明より、我々の時間感覚に近いものであると考えられる。しかし、この時間論を言語に当てはめようとすると、いくつか検討が不十分なところが見られる。本章ではその点に関して検討したい。

#### 3.1 出来事個体の成立について

伊佐敷では、出来事個体の成立について、前節で挙げた「現在が過去に変わる瞬間を観察しようとする例」「本を熟読する例」とオリンピックの例を挙げている。しかし、前2者と後者では、出来事個体の成立に過程に違いがあると考えられる。

ここでは、本を熟読する例について説明する。以下、伊佐敷（2010 p.17）の記述である。

例えば、本を読みふけていてふと我に返り「思わず読みふけてしまった。最初のページを読んだのは随分前だな」とつぶやくとき何が生じているのであろうか。そこでは、「ふと我に返ったとき」を終端とする大きな出来事個体（「長時間にわたる読書」）が、生成中という過程を経ずに一気に成立し、同時に、その

一部として「最初のページの読書」という別の小さな出来事個体が成立している。両者ともに遡及的に、即ち「既に起こっていた」というあり方で、成立している。この場合は、「ふと我に返った」のがいつであるかは、任意である。我に返ったのが100ページまで読んだ時点であっても、200ページまで読んだ時点であっても、基本的に出来事個体の成立のあり方には何ら変化がない。つまり、どの時点を持って出来事個体の成立を見るかは、認識主体の指示に全面的に依存しているのである。

これに対して、例えば北京オリンピックなどの場合、閉幕を持って自動的に出来事個体として成立するのであり、主体の指示によって出来事個体の成立時点が変化することは基本的にあり得ない。もちろん自然災害等によって、中止になるという形で、予定の閉幕式まで行われずにオリンピックが終了するということもあり得るが、この場合も主体の認識とは独立に、その終了を持って「自然災害によって中止されたオリンピック」という形で出来事個体が成立する。

両者の違いは、その動作が内的限界性を持つか、持たないかという違いに対応する<sup>1)</sup>。内的限界性を持たない動作であれば、主体が動作を任意の時点で中断し、その時点で出来事個体が遡及的に成立するということがあり得る。しかし、内的限界性を持つ動作の場合、内的限界性に達した時点で、その動作は自動的に完了し、同時に出来事個体も成立する。例えば「服を着る」という動作は、服を着終わった時点で自動的に出来事個体として成立し、過去に移行するのであり、そこに認識主体の指示が介在する余地はないと考えられる。

さらに、内的限界性を持たない出来事についても、その主体が第三者である場合には、出来事個体の成立と指示とは一致しない。伊

佐敷の例を、誰かが本を読んでいるのを第三者が観察している、という事態に置き換えて考えてみる。本の読み始めから観察をしていたとして、例えば2時間が経過し、その間ずっと本を読み続けていたとすると、「随分長い間読みふけているな」という感想を持つことは可能である。しかし、その誰かが本を読むのを止めない限り、出来事は現在も継続中なのであり、全ての時間的成分が登場していないため、完全な一個体としては成立しないことになる。「誰かが本を読みふけた。」という出来事が完全な一個体として成立するのは、その人が本を読むのを止めた時であり、それは観察者による指示とは独立に成立する。

以上のことから、主体の指示によって出来事個体が成立するのは、(1) その出来事を構成する動作の性格が内的限界性を持たず、(2) その観察主体と動作主体が一致する場合に限られるのであり、それ以外の条件では出来事個体が観察主体の指示と独立に成立する場合も存在すると考えられる。さらに、その場合は観察主体によって出来事個体の成立が観察可能であり、つまり、現在から過去への移行も観察可能であると言える。

### 3.2 主体の意識と出来事個体の成立

ここでは、出来事を構成する動作が内的限界性を持たず、観察主体が動作主体と一致する場合について、さらに考察を進める。我々はしばしば複数の行為を同時に行なうことがある。例えば筆者は現在コーヒーを飲み、音楽を聞きながら、論文を書くという作業を進めている。さらに、筆者が論文を書いている周辺には、筆者が現在認識していないものも含めて様々な物個体が存在しており、それぞれに変化をしたり、していなかったりする。現実の「経験の場として現在」においては、このように複数の物個体が同時変更的に変化

し続けており、主体自身も複数の行為を並行して行っているというのがむしろ通常のあり方である。そうした現実の「経験の場としての現在」において、出来事個体の成立と、現在から過去への移行はどのように成立するのかについて考察してみる。

まずは、音楽を聞くという事態について見てみる。音楽は筆者の動作とは無関係に進行して行き、ある曲が終了して次の曲へと移り、アルバム一枚の再生が終了すると停止する。停止したら次のアルバムを選択して再生を開始するとまた同じプロセスが繰り返される。この一連のプロセスにおいて、「ある曲の再生」、「次の曲の再生」という出来事個体が連続して成立して行き、アルバム一枚の再生が終わった時点で、「あるアルバムの再生」という出来事個体が成立していると思えることは一応可能である。

コーヒーについても、同様に、論文の執筆作業前に入れたコーヒーを、サーバーからカップに入れて、少しずつ飲んでいく。一口飲む毎にコーヒーは減っていき、最後にカップの中のコーヒーはなくなる。なくなったらまたサーバーからカップにコーヒーを写してコーヒーを飲む。最終的にサーバーが空になった時点で、コーヒーを飲むという出来事は終了するが、その間に「最初の一杯のコーヒーを飲む」「次の一杯のコーヒーを飲む」という出来事個体が連続して連続していると思えることができる。

しかし、「ある曲の再生」や「最初の一杯のコーヒーを飲む」という出来事が完了し、出来事個体として成立したとして、それによって、現在が過去に移行し、過去でないものとしての現在が現れる、と言えるであろうか。少なくとも筆者の意識ではそうは思われない。主体の意識としては、現在は「論文を書いている」のであり、その作業が継続している間

は、例えいくつかの出来事個体が成立しても、「経験の場としての現在」は継続している。「経験の場としての現在」が出来事個体によって区切られるのは、「今日はここまでにするか」と決めて論文の執筆作業を終了し、就寝前のストレッチなど次の作業に移った時である。つまり、出来事個体の成立にも、現在から過去への移行と伴うものと伴わないものがあるということになる。

では、この違いは何によるのであろうか。我々は、日常様々な行為を行なっているが、その行為には、「自分は今～をしている」という随伴意識が伴う<sup>2)</sup>。「音楽を聞く」は受動的行為、「コーヒーを飲む」は能動的行為である。いずれも、「あなたは、今音楽を聞いていますか」、「あなたは、今コーヒーを飲んでいますか」という問いには、「はい」と答えられることから、随伴意識によって捉えられている行為である。しかし、いずれも、「あなたは、今何をしていますか」という問いの答えにはなり得ない。この問いの答えとなり得るのは「論文を書いている」のみである。

つまり、主体は複数の行動を平行して行う場合があるが、その場合にも、「あなたは、今何をしていますか」への答えとなるような形で、主体が現在行なっていると認識している行為は一つである。その行為が何らかの形で完了した場合には、現在から過去への移行が成立するが、それ以外の行為について出来事個体が成立したとしても、経験の場としての現在は継続するのではないだろうか。また、例えば電話がかかって来たなどの理由で、論文の執筆を中断した場合にも、電話を切ってから再び執筆を再開することによって、中断前と中断後の執筆を繋げて一つの出来事個体と見なすこともできる。さらには、論文の完成を持って一つの出来事個体と見なし、それ

までは出来事はずっと継続中であると見るということも可能である。

### 3.3 他者の動作についての出来事個体の成立

次に、動作主体が第三者であり、観察者として出来事個体の成立を知るというケースについて考えてみよう。動作主体が観察主体と一致する場合、すなわち行為者が自分である場合には、行為は開始から終了（中断の場合も含めて）まで、全ての時間的成分を観察可能である。これに対して、行為者が他者である場合、観察主体が行為を開始から終了まで観察できるのはむしろ限定された条件を満たす場合のみであり、例えば、観察主体が行為の途中で行為主体から物理的に離れてしまえば、その出来事個体の生成を見ることはできない。

例えば、観察者が誰かと一緒に食事をする場合を考えてみる。無事に食事を終了した場合においては、観察者は行為主体が食事を開始してから終了するまでの一部始終を観察することが可能であり、翌日に「～さんは昨日スパゲッティを食べた」のように出来事個体として指示することが可能である。一方、観察者がどこかに行く途中で、通りに面したレストランで、誰かがスパゲッティを食べているのを見かけたという場合を考えてみる。この場合は、食事の終了、つまり出来事個体の生成を観察者は観察できない。翌日になれば、一日以上スパゲッティを食べ続けているということはおよそあり得ないので、「～さんは昨日スパゲッティを食べた」という出来事個体が成立しているのは、ほぼ間違いないことは推察できる。しかし、この場合は「～さんは昨日スパゲッティを食べていた」という形で指示され、「～さんは昨日スパゲッティを食べた」という形での出来事個体の指示は難しい。

一緒に行動して行為の一部始終を観察するという事は、それほど一般的ではないので、他者の行為について出来事個体が指示される場合には、観察以外の条件によって個体の成立を認識していると考えられる。第一に、その出来事個体の指示が可能な他者、多くの場合は当の行為の主体であるが、言語的に報告を受けた場合が考えられる。例えば、誰かから「私は昨日スパゲティを食べた」ということを聞けば、それを「～さんは昨日スパゲティを食べた」という形で指示することが可能になる。次に、その行為が何らかの結果を生むものである場合、その結果を観察することによって、出来事個体への指示が可能になる。例えば、論文の執筆のような行為は結果として、「出来上がった論文」という生成物を残す。雑誌等でその論文を見た観察者は、行為のプロセスについて一切観察していなくても、「～さんは論文を書いた」という形で出来事個体への指示が可能になる。

次にこれらの出来事個体への指示と、「過去移行的時間経過」との関係について述べる。第3者を主体とする出来事個体が指示できるようになる3つの条件のうちで、「過去移行的時間経過」が主体に発生する可能性があるのは、最初に挙げた直接観察している場合のみである。言語による報告を受ける場合も、結果を見た場合も、観察者の過去移行的時間経過には何ら影響を与えないと考えられる。

### 3.4 第3者の行為を観察する場合の現在から過去への移行について

前節で、第3者を主体とする行為について、出来事個体の成立に伴い過去移行的時間経過が生じるのは、直接観察している場合に限られると述べた。しかし、直接観察している場合には、出来事個体の成立に伴って、必ず過去移行的時間経過が生じるとは限らない。

以下、サッカーの試合を見ているというケースで考察してみる。

最初に、公園で、ボーッとしている時、横で子供達がサッカーをしているという条件を考えてみる。見るともなしに見ていると、試合は終わり、子ども達は挨拶をして帰っていった。この条件では、試合の終了と共に観察者の現在に何ら変化を及ぼさないため、過去移行的時間経過は生じないと考えられる。次に、競技場でJリーグの試合を観戦するという条件で考えてみる。試合開始から、ハーフタイムを経て、審判のホイッスルで試合は終了する。この場合では、観察者に過去移行的時間経過が生じる。

つまり、自分の行為の場合と同様、他者の行為を観察する場合にも、主体の意識のあり方が過去移行的時間経過に影響するのである。自分がサッカーを観戦しているという意識のもとでは、試合の終了が現在を過去へと移行させる。しかし、特に試合を観戦しているという意識がない場合には、試合が終了して出来事個体が成立したとしても、現在は過去に移行しないと考えられる。

### 3.5 出来事個体の成立に影響する要素について

本節では、伊佐敷の時間論を基に、出来事個体の成立に関わる要素について検討を行なった。その結果、行為の内的限界性、出来事を指示する観察者と行為主体の関係、主体の持つ随伴意識、観察者の意識のあり方などが出来事個体の成立や、過去移行的時間経過に関連していることがわかった。

実際のテキストを分析する上では、これらの要素をある程度統制していく必要がある。本稿では、分析の対象として、サッカーの試合についての記事を用いる。これは、90分で完結するという内的限界性を持つ出来事であ



る。試合に関わる行為は、複数の選手や審判によって行なわれるが、記事の執筆者（観察者）は第三者として外部からこの行為を観察する。観察者の意識としては、この出来事の終了が過去移行的時間経過をもたらすようなものであり、基本的に試合中の全ての行為を開始から終了まで観察する<sup>3)</sup>。

#### 4. 出来事個体の言語による記述

具体的なテキストの分析に入る前に、サッカーの試合の出来事個体としての内部構造について整理しておく。最も大きな出来事個体は、「試合」そのものである。これは、「グランパスがエスパルスに勝った（負けた／引き分けた）」のような形で指示できる。一つの「試合」は、無数のプレーによって構成されるが、直接結果に影響する出来事個体としては、「得点」が挙げられる。「得点」は「試合」に不可逆な性質変化を与え、「前半20分にグランパスが一点取った」のような形で指示される。「得点」はさらにそれに繋がる「プレー」という出来事個体により指示され、「～へのパスが通った。」「～がシュートした」のような形で指示される。さらに、「試合」には直接「得点」に繋がらない無数の「プレー」という出来事個体が含まれている。

サッカーの試合を現象としてより詳細に見た場合、そこでは両チーム22名の選手と審判が、90分間の間、同時平行的にそれぞれ継起的に様々な行為を行なっているものとして見ることができる。それぞれの行為はボールを巡って関連を持ち、ルールにしたがって意味付けられて最終的に勝ち負けという結果によって完全な出来事個体として成立する。「試合」という出来事個体は、個々の選手の全ての行為とそれによって生じた出来事個体を含み、完全な一個体となった時点で、概念上そのどんな細部まで確定している。しかし、現実

は、直接観察している場合であっても、22名全ての選手の行為を完全に把握することは不可能である。観察者が実際に把握する出来事個体の内容は、ボールの動きを中心にしてその周囲で行なわれた選手の行為に限られる。

さらに、出来事個体の内部の出来事は、それ以前に成立した出来事個体と因果関係を持つ場合がある。「20分過ぎにシュートが決まらなかったのは、欠場明けて本調子ではなかったからである」という因果関係は、「試合」以前に成立した「選手の怪我」「欠場」という出来事個体が関係している。また、出来事個体の結果は、その後に予定されている別の出来事一般に影響を与えることもある。「試合に勝てば、ナビスコカップへの出場が決まる」などの場合がそうである。さらに、その出来事と同時平行的に生成している出来事も関連する。試合開始前から雨が降り出した、などの場合である。

以上をまとめると、一つの「試合」を説明するテキストに出てくる可能性がある必要な出来事は、以下のような種類のものがあることになる。

- (1) 出来事全体（「試合」）
- (2) 出来事全体（「試合」）を構成する出来事（「プレー」など）
- (3) 出来事開始以前に生成済みの出来事（「選手の怪我・欠場」など）
- (4) 出来事個体と同時に生成中の出来事（「他の試合」、「天候」など）
- (5) 出来事個体の生成後に予定されている出来事一般（「次の試合」「チャンピオンシップ」など）

出来事個体を言語によって記述する場合には、一文ずつ継起的に記述するという言語特有の制約がこれに加わる。

#### 4.1 スル・シタの時間的意味

ここでは、「スル」「シタ」の使い分けを中心に、テキストを分析していく。両者のアスペクト的意味は同じであり、出来事をひとまとまりのものとして指し出す「完成相」と呼ばれるものである(工藤 1995など)。また、テンスは、「スル」が非過去、「シタ」が過去として対立している。

このテンスの違いを、出来事個体への指示として考える場合、「シタ」は、その動詞で表される行為や変化を、完全な出来事個体として指示するものと考えることができる。一方、「スル」は不完全な出来事個体として指示するか、出来事一般を指示するものとして考える。以下、サッカーの試合レポートを両者がどのように使い分けられているのかを見ていく。

(1) J1第31節が10日に行われ、横浜F・マリノスと名古屋グランパスが対戦した。

(2) 首位に立つ横浜FMは、中心選手である中村俊輔が胆のう炎を患って入院。

(3) 退院はしたものの、ベンチメンバーからも外れて欠場となった。

(4) 横浜FMは開始3分、右サイドの兵藤慎剛がファーサイドヘクロスを送ると、齋藤学がゴール右を狙ったボレーシュートを放つ。(5)しかし、名古屋DF阿部翔平がブロックし、ボールはクロスバーに当たって得点とはならなかった。(6)すると8分、横浜FMの中澤佑二がペナルティエリア内でハンドの反則を取られ、名古屋にPKが与えられる。(7)これをケネディが決めて、先制点を獲得した。

(8) 失点后、押し込む横浜FMは27分、右サイドのFKからゴール前で混戦となり、ボールがゴールの中に入るが、マルキーニョスとGK植崎正剛の接触があり、主審の笛が吹かれてノーゴールとなった。

(9)44分には中澤が右CKからヘディングで合わせたが、枠の左へ外れた。(10)前半のアディショナルタイムにも、富澤清太郎がミドルシュートで狙うが、クロスバーに阻まれた。(11)前半は名古屋のリードで折り返す。

(12)後半に入りすぐ、横浜FMは試合を振り出しに戻す。(13)51分に齋藤が左サイドからカットインすると、エリア内ヘスルーパスを送り、飛び出した兵藤が流し込んだ。(14)しかし2分後、名古屋は左サイドの阿部からのパスをエリア内左で受けた藤本淳吾が、左足を振り抜いてネットを揺らし、すぐさま勝ち越しに成功する。

(15)再びリードを許した横浜FMは攻撃的なカードを切り、同点を目指すが得点は生まれず。(16)2-1で名古屋が勝利した。(17)横浜FMは今季、リーグ戦でホーム初黒星となった。

(18)同時刻にキックオフの3位サンフレッチェ広島は柏レイソルと1-1で引き分けたため、暫定首位の横浜FMだが、19時キックオフの浦和レッズが勝利すると2位転落となる。

(『サッカーキング』2013年11月10日記事「中村俊輔欠場の首位横浜FM、名古屋に敗れて今季ホーム初黒星」

<http://www.soccer-king.jp/news/japan/jl/20131110/147159.html>)

まず、それぞれの文が「試合」という出来事の記述にどのような機能を果しているのかについて見ていく。まず、(1)と(16)は、「試合」という出来事全体に対する指示であり、(17)は(16)の再記述である。(1)と(16)の違いとして、(1)では試合の結果への言及がされていないという点が挙げられる。しかし、(1)を「J1第31節が10日に行われ、2-1で

名古屋が勝利した。」としたとしても文章全体の構成に何ら不具合はないことから、結果に言及するかどうかはスタイルの問題にすぎないと考えられる。全て「シタ」と過去のテンスで指示されている。

次に、「試合」の外部にあって「試合」と影響関係にある出来事の記述を見ていく。(2)、(3)は「試合」開始以前に成立し、「試合」に影響を与えたと考えられる他の出来事個体の記述である。2文で一つの出来事個体を指示しており、(2)は無時制、(3)は過去形で指示されている。(18)は、「試合」と同時平行的に生成、もしくは生成が予定されていて、「試合」と関連する出来事への言及である。「スル」と非過去のテンスで指示されている。

(4)～(15)が試合内容の説明である。「試合」という大きな出来事個体は、その構成要素である小さな出来事個体への指示によって説明されている。ただし、(11)は出来事個体の指示ではなく、試合の前半を一つの出来事とした時の再記述と見なすことができる。よって、(4)～(10)および、(12)～(15)が小さな出来事個体への指示に当たる。ここでは、過去と非過去のテンスが混在している。

## 4.2 記述の2レベル

ここで、出来事個体の記述が大きく2つの階層に分かれていることがわかる。一つは、「試合」という大きな出来事個体と同じレベルの出来事の階層である。「試合」そのものが一つの出来事個体であり、それ以前に生成した出来事個体の影響を受けたり、それ移行に生成する予定の出来事一般に影響を与えたりする。(1)～(3)および(16)～(18)はこのレベルでの出来事個体への指示となっている。これに対して、(4)～(10)および(12)～(15)は試合内で生成した小さな出来事個体への指示であり、「試合」の内容を説明している。

(11)はその中間の階層に属し、試合の前半を一つの出来事個体として指示している。以下、それぞれの階層において、テンスがどのような働きをしているのかを見ていく。

### 4.2.1 「試合」レベルの記述

まず、「試合」と同じレベルの出来事個体の記述である。このテキストは「試合」を説明するためのものであるため、「試合」がもっとも大きなレベルの出来事個体となっている。しかし、「試合」も、他の「試合」と組み合わせり、より大きな出来事個体、例えば「2013年度のチャンピオンシップ」を説明するための構成要素となり得る。さらに、2013年度のチャンピオンシップも、他の年度のチャンピオンシップと組み合わせられて、「XXの3連破」のようなより大きな出来事の構成要素となり得る。

したがって、このテキストで「試合」が最も上位の階層の出来事個体であるのは、必然ではない。しかし、出来事の説明をするテキストでは、多くの場合、説明の対象となる出来事が存在し、それが最上位の階層となると考えられる。ここでは、「試合」という出来事を、そのテキストの中の最上位の階層の出来事個体の記述として見る。

このレベルの記述の特徴は、「シタ」という非過去のテンスと、「スル」という過去のテンスが実時間に対応しているということである。このため、(1)(3)、(16)(17)の「シタ」は、「スル」に置き換えることはできないし、(18)の文末の「スル」も「シタ」に置き換えることができない。(2)は動詞を省略しているため、無時制的表現となっているが、もし補うとすれば、「シタ」であって、「スル」ではあり得ない。もし、これらを無理に置き換えた場合、「シタ」から「スル」への置き換えは、生成済みの出来事個体を、これから生

成する予定の出来事一般に、「シタ」から「スル」への置き換えは、これから生成する予定の出来事一般を生成済みの出来事個体へと変えてしまうため、これらのテンスは、実時間にそのまま対応しているものと見なすことができる。

次に、このレベルの記述の特徴は、「シタ」の連続が、工藤(1995)で言う継起のタクシスとは全く見なせないことである。(1)と(3)は「シタ」の連続であるが、時間的順序から見ると逆になっており、(3)の方が(1)に先行している。(16)と(17)も「シタ」の連続となっているが、2つの出来事は同時である。

#### 4.2.2 試合を構成する出来事の記述

一方で、「試合」を構成する出来事のレベルでは、「スル」「シタ」の使い分けは実時間に対応しておらず、全ての出来事が既に生成済みであるにも関わらず、「スル」と「シタ」が混在している。(4)～(15)の「スル」の文は全て「シタ」に変えたとしても、文章全体の時間関係に大きな影響はない。逆に、「シタ」の文を「スル」に変えることも、周囲の文を調整すれば可能である。しかし、一方で「スル」「シタ」の使い分けは、このテキストの中では一貫性を持っている。

まず、(4)と(6)のスル形であるが、それぞれ次の文と組み合わせられて、選手の行為と、その結果という形で、1つの出来事個体を説明している。つまり、(4)(6)のテンスが非過去であることは、その文単独では出来事個体が完結していないことを表していることが出来る。続く(5)(7)のテンスが過去となっていることで、(5)および(7)で出来事個体が完成する。これらの「スル」はいずれも「シタ」への置き換えが可能であるが、置き換えた場合いずれも次の文との関連が弱くなると考えられる。

次に(11)の「スル」に関しては、全く問題なく「シタ」への置き換えが可能である。(12)の「スル」に関しては、事情がやや異なる。後に続く(13)は(12)を行為のレベルで説明するという関係になっており、(12)と(13)は同じ出来事個体の再記述という関係になっている。ここで、(12)を「シタ」に置き換えた場合、(13)が(12)の再記述であるのか、(12)の後に生成した出来事個体であるのかが、やや曖昧になる。つまり、(12)が「スル」で指示されていることによって、(13)がその再記述であることが明示的に示されている。

(14)は「スル」になっているが、これも問題なく「シタ」に置き換えることが可能である。しかし、(14)以降は試合に影響を与える出来事個体は生成していないので、(15)を経て(16)で出来事を完結させる方が、より自然な印象がある。(15)は「試合」全体を指示するレベルの記述であると共に、試合を構成する出来事のレベルでも「試合の終了」という出来事を指示しており、2つのレベルをつなぐ役割をも果している。

残った(8)から(10)は、複文の形で行為とその結果が一文に収められたものである。これらは、「シタ」によって完全な出来事個体として指示されている。

以上の分析から次のようなことがわかる。まず、「シタ」で終わる文はその文が記述する出来事個体を、完全な一個体として指示する。しかし、「スル」で終わる文は、それ単独では完全な一個体としては指示せず、次の文が「シタ」で終わる文と組み合わせられて一つの出来事個体を指示する。次の文に来るものは、その文が表す行為の結果であったり、その文が指示する出来事の再記述であったりする。このように、時間の経過と共に生成する出来事個体を順に指示していくことによって、試合内容の説明は構成されている。

では、「シタ」によって指示される出来事個体の記述の時間的意味は何なのであろうか。これは、伊佐敷の「過去移行的時間経過」の説明がそのまま当てはまるのではないだろうか。つまり、説明の対象となる出来事個体を構成する小さな出来事個体の記述に移った時点で、テンスは実時間から離れ、出来事内の時間経過を表すようになる。そこでは、「試合」という出来事個体内の、いわば仮想的な「経験の場としての現在」が設定される。そこに、「シタ」の形で出来事個体が指示される度に、「過去移行的時間経過」が生じ、その出来事までが過去として確定すると共に、新たな「過去でないものとしての現在」が切り出される。工藤（1995）の言う継起性はこの作用によって生じる出来事の継起的順序を指していると考えることができる。

## 5. 結論と今後の課題

以上、伊佐敷の理論をもとに、出来事を説明するテキストがどのように構成されているかについて分析してきた。分析の結果として、以下の点を指摘した。

- (1) テキストは、説明の対象となる出来事個体と同じレベルの出来事個体に関する記述と、説明の対象となる出来事個体内の小さな出来事個体に関する記述に分かれる。出来事個体の説明は、その出来事個体を構成する小さな出来事個体を記述することによって得られる。
- (2) 説明の対象となる出来事個体と同じレベルの記述では、テンスは実時間に対応している。また、「シタ」の連続が継起性を表すとは必ずしも言えない。
- (3) 出来事個体内の小さな出来事個体の記述では、テンスは、実時間を離れ、出来事個体内の時間経過に対応することになる。ここでは、「シタ」によって出来事個体が指

示される度に、仮想的な「過去移行的時間経過」が生じ、それ以前の出来事が過去として確定すると共に、新たな「過去でないものとしての現在」が生じる。結果として、出来事個体の連続は継起的な順序を表すことになる。

最後に課題を述べる。今回分析の対象とした出来事は、サッカーの試合という、非常に完結性が高く、開始点と終了点がはっきりわかれているものである。出来事の結果も、「勝つ／負ける／引き分ける」という形で非常にはっきりしており、内部を構成する小さな出来事を選択基準も、結果への影響という形で非常にはっきりしている。また、内部を構成する出来事の記述も「シテイル」は使われていない。今回は、分析の枠組を探るために、あえて単純なテキストを利用したが、例えば小説の中の出来事のように、個々の出来事の記述が説明される出来事の意味を決定するようなものを分析する場合には、より詳細な分析が必要になるであろう。

また、本稿では、記述のレベルが2つに分かれることを指摘したが、これが言語的にどのような形で実現されるのかまでは指摘できなかった。記述のレベルの行き来がどのように成されるのかを指摘するためには、より多くの種類のテキストの分析が必要になるであろう。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 動詞の限界性については、須田（2010）などで詳しく議論されている。
- 2) ここで言う随伴意識については、山口（2002）の議論を参考にしている。
- 3) 実際には観察者が試合内の全ての行為を観察することは不可能である。しかし、記事中に記述された出来事は、「試合中の全ての出来事の中から意味のあるものを抜き出したもの」であり、記述された出来事については観察者がその

一部始終を観察したことを前提として書かれていることから、観察のタイプとしてこのように記述した。

<参考文献>

- 伊佐敷隆弘（2010）『時間様相の形而上学』勁草書房
- 入不二基義（2002）『時間は実在するか』講談社現代新書
- 工藤真由美（1995）『テンス・アスペクト体系とテキスト』ひつじ書房
- 須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
- 日本語教育学会 編（2005）『新版 日本語教育辞典』大修館書店
- 森山卓郎（1986）「日本語アスペクトの時定項分析」宮地裕 編『論集日本語研究（一）現代編』明治書院 78-116.
- 山口一郎（2002）『現象学ことはじめ』日本評論社